

これまで、八戸クリニッック街かどミュージアムでは日本特有の伝統木版画を幅広くご紹介するた
め、江戸から昭和初期ま
での時代・ジャンルの様
々な作品を織り交ぜなが
ら、展覧会を行ってきま
した。それにより、一連
のシリーズものをまとめ
てご紹介する機会は、昨
年の「源氏物語」まであ
りませんでした。

現在開催中の「歌川国
芳 江戸のダジャレ旅」
は、国芳の一大シリーズ
「木曾街道六十九次」を
一斉公開すると共に関連
作品も展示しています。

今回は、中でも古典を題
材にした作品を2点ご紹介
します。

まずは、山のような盛

下

江戸のダジャレ旅

八戸で歌川国芳展

蕎麦を食べている達磨を
描いた作品。「山」のよ
うな「盛」蕎麦というこ
とで、ダジャレで木曾街
道の「守山」という宿駅
にこの絵を描いていま
す。さらに、蕎麦はヘギ
という木の器に盛り付
けた「へぎ」と「壁」から配
役は達磨大師にしたと
考えられています。崇高
な対象を、俗っぽく描く
のも江戸文化の好みで
す。

浮世絵の役割

古典題材に文化継承

芳の兄弟子で浮世絵史上
最も売れた絵師・歌川国
貞の作品。京都清水寺の
めした桜姫に見立てる様
子。続いてもう一枚は、国
芳の兄弟子で浮世絵史上
最も売れた絵師・歌川国
貞の作品。京都清水寺の
めした桜姫に見立てる様
子。

に、暴風雨に乱れ散る桜
の木が描かれています。
さらにこの作品には、
在原業平の和歌「世の中
にたへて桜の なかり
せば 春の心は のどけ
からまし」（この世に桜
が公家文化を取り入れた
ように、いつの時代も新
たな文化の担い手が、自
分たちが憧れる文化を自
らの趣向にアレンジし取
り込んでいく方法の一つ
にもなっているのです。
そして、その取り込まれ
た表現が独自の様式を持
った時、そこに誰もが確
認できるほど鮮明に一つ
の文化が立ち上がってい
るのではないでしょう
か。浮世絵は、まさに錦
の如く鮮やかに江戸庶民
を染めた美意識・文化の
表れの一つでした。

何かを別の何かに変換
するこのダジャレや見立
てが、古典文化を題材に
した時、それは文化を継
承する機能も持ち合わせ
ます。古代より数多ある
お話の中から長い年月を
かけ、時代時代の日本人
が選択し残してきたも
の。そこには、日本らし
さがしみ込んでおり、浮
世絵も江戸後期の流行の
中でその役割を確実に担
っていたのです。

小倉学

今かと花咲く日を待ち望
み、咲けば今度は風雨に
散らぬかと憂う、そんな
ことなく、心穏やかな春
を過ごせるのに）が添え
られています。これは、
美しくはかない桜の花を
賛美する平安歌人の歌
を、桜姫さえいなければ
穏やかな人生を送って行
けたのにと、心狂う清玄
※「歌川国芳 江戸の
ダジャレ旅」は6月19日
まで。問い合わせは同ミ
ュージアム（電話017
8(32)7737）へ。

